

吃音者問題を差別の問題として読み解く!!

この文章の表題を見て、吃音者の一部から、またとりわけ非吃音者から吃音者の問題に差別の問題などあるのか?という問いかけがなされるだろうと思います。

全言連(吃音者の全国組織—全国言友会連絡協議会の略称)が作った『どもりの相談』というパンフがあります。その中で、「どもりを治す方法は見いだせていないが、子供を吃音者にする方法はある。子供が言葉に詰まった時に、「落ち着いて話しなさい。」などと働きかけることである。」という主旨の話があります。この「落ち着いて話しなさい」などという反応が吃音者にとってどのような意味をもつのか、吃音者ならば自らの経験において理解しえるでしょう。更に、どもった時の負の反応とセットになった、どもらないで話した時の、「やればできるじゃないの」という反応も、どもってはいけないという意識を拡大助長します。これらの社会学でいうサンクション(賞罰)は、これらの場合それ自体が差別と言えます。

差別と言えば一般的に排除(広義)型の抹殺・隔離・排除(狭義の排除)だけをとらえがちで、抑圧型の融和・同化という差別をとらえられないということがよく起きます。同化は民族差別における同化政策の抑圧性が顕著に示されますが、障害者差別においては、障害者が健全者に近づくことが幸せだという健全者幻想において、健全者に近づくことを強要されます。科学の名による発達の押し付けもこれに類することです。

この差別の形態の違いの問題は、障害者への(差別的な)役割期待に於いて端的に示されます。障害者への差別的役割期待は二つあります。一つは「社会に迷惑をかけないように社会の片隅で柔順に生きよ!」という(大方の人達に)明らかに差別的なものです。もう一つは、「努力して障害を克服しろ!」という抑圧—強要です。「克服」には二つの形態があります。一つは、障害そのものを無くす、無くすという方向で努力する、という「同化」の形態です。もう一つは、障害そのものはそのままにして、その他の個性を伸ばすことによって社会参加するという「融和」の形態です。これらの「同化」・「融和」ということを差別としてとらえられない傾向は常に出て来ます。例えば、「同情」ということがつい最近まで、差別としてとらえられない傾向がありました。これも「融和」型の差別と言え得えます(最近ようやく、被差別者から、「同情」ということが差別的心性だと指摘され、このことが差別を問題にする人達の間では、共通確認となってきました)。「努力」ということについても、同様に進みつつあります。フェミニズムで「頑張ろうなんて、やめよう!」という提起は、個人的努力がかえって自分たちの首をしめることになるということを示しています。

もう一つ、押さえておかねばならないのは、排除型の差別を抑圧型の差別よりも重い差別というところへの傾向です。障害の重いとされる障害者が排除型の差別を受け、障害の軽いとされる障害者が抑圧型の差別を受ける傾向があります。そのことから、差別の軽重というところへの進んでしまいます。抑圧型の差別を受ける者は、何とか障害者として

パス（通過する一瞬）しようとし、それだけ自らのアイデンティティをとらえられないで葛藤します。よく障害の軽いの方が辛いのでは、という指摘も出て来ます（実は、どちらが辛いかという問題ではなく、これは形態の違いの問題です）。

このことをとらえ返すのに、私はボクシングに於ける、ジャブとストレート・フックの効用の違いという例を持ち出します（「闘い」を例に出すのは、余り適切ではないと思いますが）。ストレートやフックは一発で相手を倒す力もあります。一方、ジャブにはそのような効用はありません。しかし、相手の戦意をくじき、ダメージを蓄積させるという意味で、テクニシャンといわれるボクサーはジャブを巧みに使います。ここで、ストレートやフックを排除型の差別に、ジャブを抑圧型の差別に譬えるとイメージが掴めるのではないかと考えています。どちらが効くかダメージが大きいかとは一概には言えません。それはダメージの形の違いということではないかと思えます。吃音者はジャブ型の差別を受けることが多く、ジャブを受けて出足も手数も出なくなるように消極的になる場合や、相手の心の動きなど無視して一方的に喋りまくる形で吃音を「克服」した（「克服」という言葉自体に、「吃音＝障害」の否定性を感じ反発しているですが）タイプの吃音者（&自称「元吃音者」）も多く見られます。ちょうどジャブを数多く受けて、もう相手を見ずにストレートやフックの空振りを繰り返すように。

さて、吃音者を差別という観点からとらえるということで、小文を書いてきましたが、逆に、差別ということ吃音者問題からとらえ返していくと、差別ということが明らかになって来ます。とりわけ、冒頭に述べた「落ち着いて話さない」という言葉のもつ抑圧性とか、「どもりなんて気のもちかたの問題よ！」という言葉のもつ抑圧性とか、吃音者ならば、共通の了解事項としてある「まなざしの恐怖」に対応するまなざし、笑い、「一種独特の沈黙」などなど、従来差別ととらえられなかったことが差別として明らかになって来ます。又、「同化」という形態での差別をとらえようとする時、吃音者問題から読み解くことができます。

最後に本題から外れますが、何故吃音が否定的にとらえられるのかということにコメントし、まとめの話に入ります。

吃音の定義の中で、吃音が「言語規範に反する、意味のない行為である」として、否定的にとらえられるのですが、そもそも言語の意味を叙述ということに集約しようというところから生まれるのであって、言語論で指摘されるもう二つ意味の喚起・表出ということでは吃音ははっきりと意味のある行為ではないでしょうか。それは場の緊張・場の差別的関係を表出・喚起しているのではないのでしょうか？

それらのことから、場ということをとらえ返し、どのような場を作っていくのか？どのような場に変えていくのか？ということが吃音者問題が投げかけていることではないでしょうか？そして、吃音者自身がそのようなことを担っていくこととしてあるのではないのでしょうか？

（全言連への対話シリーズ 『吃コミ』投稿 として投稿した文を一部改稿）